

*** 塔望遠鏡分光室にある赤道儀架台の一部は、昭和11年北海道日食の望遠鏡か？**

最近整備を進めている塔望遠鏡の半地下の分光室に錆だらけになった望遠鏡架台の一部がよっきりと立っている(写真1)。これが何時からこの場所にあるのかも定かではない。筆者が塔望遠鏡で仕事を始めたのは昭和41年(1966年)であるが、その時存在していたかの記憶はない。重量は相当なものである。簡単には持ち込めない。



写真1 半地下の分光室に聳える架台の一部

塔望遠鏡は昭和42年(1967年)頃から使われていない。昭和43年(1968年)にこの塔望遠鏡が更新され、岡山天体物理観測所に新たに建設された65cmクーデ型太陽望遠鏡が稼働を始めたからである。その後、塔望遠鏡は使用されなくなった他の望遠鏡施設と同じように倉庫と化していた。塔望遠鏡は主に日食観測の観測機器の保管場所、またその輸送箱の保管場所になっていて、遂には電気、水道さえ止められ、1998年には有形文化財として登録されたが荒廃は進み、ドームの雨漏りはひどくなり、半地下の望遠鏡床まで雨水が

溜まるようになっていた。国立天文台に残された貴重な歴史的観測器械の発掘、復元等を手掛けている 2008 年 4 月に発足したアーカイブ室の働きかけで 2009 年末にはドームの雨漏り修理のためドーム屋根の葺き替えが行われ、2009 年度末には電気の回復を実現した。

塔望遠鏡の大掃除、片付けを行い人が入れるようになって、何組かの見学に訪れる人を案内していて、この望遠鏡架台の一部の由来を尋ねられるが、「わかりません」と答えるしかなかったのである。ところが天文学史研究家の佐藤利男氏を案内した時、氏は「これは関東大震災で転落大破したメルツ・レプソルド子午環の鏡筒ではないか？」と言い出したのである。この意見に対して筆者は、子午環の鏡筒にしては長すぎる、センターキューブへの取り付け部分にリブ構造があることからメルツ・レプソルド子午環の鏡筒ではないという推論を申し上げ、佐藤氏も了解された。しかし、佐藤氏は、こんどはこの望遠鏡架台の一部は、昭和 11 年（1936 年）の北海道女満別日食時に使用された赤道儀の一部ではないかと主張され、当時の製作者であった京都の西村製作所まで問い合わせる事態に発展した。写真 2 が国立天文台に残る昭和 11 年（1936 年）の日食時の望遠鏡の写真である。



写真 2 昭和 11 年（1936 年）北海道女満別日食の赤道儀望遠鏡

確かに、このイギリス式赤道儀の極軸は塔望遠鏡半地下の分光室に聳えている望遠鏡架台の一部にそっくりである。確かにセンターキューブへの取り付け部分には同じリブ構造が見える（写真 3）。先端部のリブ構造はこの写真からは判然としないが疑う余地はないようである。このイギリス式赤道儀のセンターキューブの上下どちらの部分かも判然としない。なぜこの一方だけが残っているのかも不思議である。天文学者は貧乏性である。使え

る機材は有効利用しようとする。お陰で貴重な望遠鏡の対物レンズは他に転用された例が多い。この北海道女満別で使用されたイギリス式赤道儀は、三鷹に帰り、戦後、畑中武夫先生の手により電波天文学初期の電波望遠鏡の架台に転用された。このあたりのことにつ



写真3 センターキューブ付近のリブ構造が分かる拡大写真

いては、アーカイブ室新聞 134 号 (2009 年 2 月 13 日) に「日本最初の電波望遠鏡の写真発見」という記事に書いた。そして三鷹で朽ち果てようとしていたこの赤道儀を使った電波望遠鏡の架台を使い、日本最初の電波望遠鏡が野辺山の宇宙電波観測所の御子柴氏の手により復元され、野辺山宇宙電波観測所に展示されている。